

「一溪の風

県立神奈川工業高校100周年

ベテラン俳優の織本順吉(電気31)は、3年生以降は生徒動員で電機メーカー工場に通った。

そんな時代でも、神工では時折「総見」と称し、生徒を映画鑑賞に連れて行った。その際に見た「姿三四郎」を級友が演劇用の脚本に書き直し、自分たちで演じたことがある。自身は三四郎の師匠役。動員先の工場でも度々上演したが、生活指導を担当する生徒監に「こんな時期にけしからん」とやめさせられた。「戦争が全てを支配した時代でした。でも神工で過ごし、一種の反骨精神が身につきました」

俳優・教育

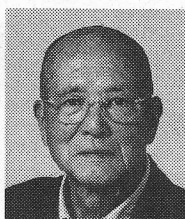
④

戦後就職すると、同僚でのちに劇作家となる大橋喜一に、労働組合の文化活動の一つ「職場演劇」に誘われる。勤務後に川崎の「京浜演劇学校」に通うなど演劇活動を始めた直後、人員整理で解雇された。このとき仲間が、プロの俳優になることを勧めてくれた。

「思いもありませんでしたが、ほかに技術もないし、解雇され



阿部 進さん



織本 順吉さん

屈折していたし、それもいかなあ」と。1949年新協劇団入団、54年には岡田英次、西村晃らと劇団青俳を結成。以来舞台や映画、テレビで約2千本の作品に出演する。

このところ人気が急上昇中の若手俳優、窪田正孝(機械93)、柳下大(建設93)も同校出身だ。

◇

「カバゴン」こと教育評論家の阿部進(機械36)は2年生のとき終戦。焼け跡にできた実習工場に、教員や友人と秋葉原で工作機械を買って設置したことが心に残る。

戦後は、県主催の高校演劇コンクール出場が忘れられない。「建築科が舞台装置、電気科が効果、図案科が衣装などを分担し、機械科の僕は役者です。海と電極で明るさを自在に調整

する照明装置などを作り、総合芸術賞をもらいました」。この経験で得た「物事は異なる力が集まって進む」という考えは自身の根っことなった。

卒業後、進学も就職もできずにいたとき、演劇部の顧問教師が小学校の産休教員代理の仕事を紹介してくれた。これが縁で教員になり、その傍ら周囲の都会っ子の姿を「現代子」も「気質」「現代っ子採点法」につづってベストセラーに。「現代っ子」は自身の造語だ。

65年に退職し、「創造教育センター」を設立。科学実験や自然体験を取り入れた独自の教育を実践し、教育評論家としてマスコミで活躍する。「面白いと思ったものを子どもに伝えるのが僕の教育です」。現在は全国に出前授業に赴く一方、横浜市放課後事業で学習のプログラムを担当。今も子どもたちの人気者であり、よき理解者だ。|| 敬称略、() 内は専攻科と通算卒業期

演劇体験が根っこに